

コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する調査研究＜中国貴州省編＞

中国貴州省では1986年から少数民族の村が観光開放され、衣装、歌、舞踊、建築などの特徴ある少数民族文化が観光提供されるようになった。こうした伝統文化の観光化には、文化の「真正性」が失われるという批判もあるが、貴州省では、むしろ観光開放が伝統文化の持続・発展につながる状況が現れている。本研究は、論文、記事、文献などの調査、現地視察調査、研究者・関係者ヒアリング等を行い、文化保護と観光開発を両立させたコミュニティ・ベースの観光の成功要因と課題についての研究に取り組んだものであり、5つの成功要因と6つの課題を抽出した。また、それらのベースにコミュニティの自律性があることを提示するものである。

■ 緒川弘隆、黒須宏志、小林英俊

研究報告書の概要

コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する調査研究＜中国貴州省編＞報告書

【目次】

1章. 研究の目的と方法

- (1) 研究の目的
- (2) 研究の方法
- (3) 研究対象地の概要

2章. 研究結果の概要

- (1) 貴州省の民族観光の概要
- (2) 考察・検討・議論のまとめ

3章. 現地視察結果の観光地ライフサイクル論への応用

4章. 研究実施の記録

- (1) 論文・記事・文献の検索
- (2) 第1回研究会議事メモ
- (3) 曾士才教授ヒアリングメモ
- (4) 現地調査の記録
- (5) 第2回研究会議事メモ
- (6) 第3回研究会議事メモ

1. はじめに

文化面や地域コミュニティの面でのサステナビリティに関しては、文化的資源の対象範囲が定めづらい上に、観光資源がそのまま地域の生活者の居住環境であるケースも多く、さまざまな利害がより複雑に絡むため、状況の把握や施策の実施には困難が付きまとう。

そこで、本研究では、観光と文化のサステナビリティのあり方を考察する一つの方法として、少数民族が居住する地域に着目した。少数民族は、周辺地域と比較して特異な文化を持つことが多く、その文化は観光資源にもなりやすいが、同時に地域文化の変容のメルクマールとなる事象が多い。また、少数民族が居住する地域は、コミュニティの範囲を比較的定めやすく、さらに商工業があまり盛んでないことが多いため、地域文化への影響がもたらば観光業からというケースも多いと思われる。

以上の理由から、本研究では、文化とコミュニティのサステナビリティおよびそれらに対する観光のあり方を考察することを目的とする。

2. 研究の方法・範囲

本研究では、前述の目的を果たすべく、以下の方法により行った。

- ①論文・書籍等を参考に、コミュニティと観光との関係が特徴的な地域として中華人民共和国・貴州省を選定
- ②同地域に関する論文、記事、書籍等の収集
- ③同地域の観光に関する研究者
- ④現地視察、現地関係者ヒアリング
- ⑤同地域の観光に関する議論、検討、考察、まとめ

3. 貴州省の民族観光の概要

1 貴州省の民族観光の状況

中国には中央政府に認定されているだけで55の少数民族が存在するが、貴州省にはそのうち17の少数民族が生活しているとされる。貴州省では86年から“民族観光”が振興されているが、その形態はさまざまであり、さまざまな少数民族

図1 中国・貴州省の位置



写真1 青曼村での歓迎儀式



の衣装、歌、舞踊、建築などを紹介し、イベント、アトラクションなども開催するテーマパーク（紅楓湖民族旅游村）、村全体を博物館とするエコミュージアムである生態博物館、村民挙げて旅行者を歓迎する体制を築いている民族観光村などが、それぞれの方法で観光客を集めている。

歌、舞踊、民族衣装、宗教儀礼などの民族文化は、伝統的な形式をそのまま伝えるだけではなく、同民族でも省内他地域のものも利用したり、宗教色を薄めたり、伝統的なタブーを破ったり、あるいはより漢民族から遠い要素を選択するなどして、観光向けにアレンジされたものとなっている。

2 民族文化の保護と観光開発の意義

こうした民族文化の観光化によって、文化の「真正性」が失われるという批判もあり得るが、貴州省をはじめとする中国全土の農村部では、近代化や漢文化との同化の流れが加速しつつあり、観光化とは関係なく、放っておいても各地の民族文化

が失われつつある状況にあった。

貴州省では、むしろ観光開放が、民族文化とその伝統が持続し、生き永らえるきっかけとなっており、さらに一部では民族文化の発展とも言える状況が現れつつある。

3 民族観光の成功例

少数民族観光で大きな成功を果たしたのが貴州省東南部の山間に位置するミャオ族の村・郎徳上寨であり、人口700人あまりの小さな村に年間数万人の観光客を集めるに至っている。村には、村民の収入が倍増するなど経済的な効果があっただけでなく、文化大革命や共産党政府の民族融合政策により途絶えようとしていた伝統行事や銅鼓舞や蘆笙舞といった民俗芸能が、年配者から若者に伝えられるきっかけとなり、民族文化の持続性を維持することになった。

郎徳上寨村の成功により、追隨して観光開放を進める他の村や地域が増えるとともに、貴州省全体としても民族観光の気運が高まってきたが、それにより、民族文化を学ぶ若者が増えるとともに、村や地域の間で競って技を切磋琢磨するようになった。そして、特徴的なものについては他地域のものでも積極的に学んで、アレンジして自分たちの村に導入するなど、新たな民族文化の創造・発展も見られるようになった。

その一例が「反排木鼓舞」と呼ばれるミャオ族の舞踊である。反排村出身の男性が伝統的な村の舞踊をアレンジして躍動感あふれる踊りを創造したもので、国内外に高く評価されるようになり、貴州省の民族文化をアピールするものの一つとなっている。

写真2 郎徳上寨村



4. 現地視察で見られた民族観光地の様子

前述のように貴州省内の民族観光地には、テーマパーク、生態博物館、民族観光村とさまざまなタイプがあるが、我々の視察の中心であった多くの民族観光村（ミャオ族、トン族、プイ族、老漢族）の間にも景観保護や基本的インフラの整備レベル、ホスピタリティ、さらには観光の事業としての形態などが、さまざまな違いをもたらしていた。

このような民族観光地の間での差異は、村に残る伝統文化などの資源、地理的位置、出資者と村とのつながりなども関係してくると思われるが、観光客を迎え入れてから経過した時間にも関係していると思われる。

景観面や設備面では、開発開始から間もないケースでは、十分でない場合もあるが、逆に成功地である郎徳上寨村に近い南花村に見られるように過剰な整備が行われている場所もある。

一方で、必ずしも開発からの時間の経過がマイナスに働くだけでなく、肇興村に見られるように開発から時間がたち、外部のセンスある投資家が入ってくることによって、歌や舞踊などの民族文化がより洗練された形で提供できるようになるというケースもある。

5. 貴州省の民族観光の成功要因の考察

世界各地の観光地、特に文化を主な資源とする観光地では、観光開発から年月をへるにしたがって、初期のホスピタリティが薄れ、明らかな商売目当ての業者や住民が増え、宿泊、物販、飲食施設等の乱立や看板の氾濫などにより景観が荒廃し、当の文化資源についても、民俗芸能から宗教色や伝統色が薄れ観光向けに俗化が著しいものになってしまうという、いわゆる“観光ズレ”と称されるものが現れてくる。

貴州省でも、その傾向が現れ始めていることは否定できないが、その一方で、郎徳上寨など一部の民族観光村では、開発から約20年がたつにもかかわらず、その“観光ズレ”現象を抑え、魅力の減退を防いでいると感じられた。

このような貴州省の民族観光の成功要因を分析し、大きく以下の5つを仮説として考えた。

(1) 観光収入の公平な再配分制度

まず郎徳上寨村で注目されたのは、観光収入の

分配が、不満を生まないように公平・公正に配分される仕組みができていたことであった。

村に観光客が訪れると、男は蘆笙を吹き、女は歌をうたい、水牛の角の杯で酒を勧める村入りの儀式を行う。そして、儀式後に広場で多彩な歌と踊りを披露する。村は歓迎儀式上演料として一括して観光客から1グループ当たり500円を徴収する。そして、この一連の観光の仕事に参加した村民には、民族衣装着用、盛装着用、踊り参加、蘆笙演奏、歌唱などといった役割ごとに、三角、四角、丸などの形の点数が書かれた板が渡される。そして、1カ月ごとに、観光総収入から蘆笙の修繕費や管理費などを村の経費として10～20%差し引いた後、各人の累積点数に応じて現金を分配する仕組みである。

これは、以前の人民公社時代の仕組み「工分（コンフン）制度」を生かしたものである。郎徳上寨村の観光開発を始めた当時、現場で指揮をした村の元共産党書記・陳正濤氏も、村民全員参加の原則と工分制度により、村民の間での収入の分け方が公平であったことが、大きな成功要因だったと振り返っている。

観光地が発展すると、観光収入にあずかれる者とそうでない者、あるいは観光収入の不平等な分配などが、コミュニティに亀裂をもたらし、ひいては観光地の魅力を減退させる大きな要因となる場合があるが、郎徳上寨では工分制度により、それをうまく回避している。

一方で、公平なだけでは参加者の努力や創意工夫の意欲が衰えていく可能性があるが、郎徳上寨村では、土産物などの販売収入は各自の収入になるという仕組みも同時に採用することで、工分制度との二重構造になっており、個人が伸びる余地と全体での公平性の両方を確保している。

この工分制度は、中国の共産主義に由来するものではあるが、本来、農業や工業に適用されていたものを、観光業にアレンジして適用したという点で地域独自のものであると考えられる。このように観光収入の公平な配分を図る仕組みを地域の実情に合わせて工夫して作り上げた点は大変興味深い。

（2）専業でなく兼業の観光地

郎徳上寨村や肇興村など成功している観光地では、観光を専業とするのではなく、ほかに農業や手工業などの産業と兼業で行って両立させている

ことが、成功要因の一つではないかと推測された。つまりは「観光で稼いだかった“観光立村”と言うな」という逆説である。

観光を専業とすれば、どうしても村の景観やビジネスの仕組みが観光客の興味や利便性に向けて作られたものになる。それが、旅慣れてきた旅行者に逆に“観光ズレ”だと感じさせ、魅力を大きく減退させるものになってしまう。今回の視察対象地でも、人工的に造られた村に観光専属のスタッフのみで迎える紅楓湖民族旅游村が極端な例として該当する。

それに対して、ほとんどの村では、観光収入を大きく増やしたとはいえ、いまだ農業が産業の中心であり、最も成功した郎徳上寨村でも収入の半分は農業収入となっている。そのため、生活時間のすべてを観光に割いているわけではなく、観光客への接待と民俗芸能の披露は1日2回各1時間半に限定し、早朝などその他の時間は農業に従事している。これにより何が何でも観光客から金を得ようという態度は避けることができ、周囲ののどかな田園風景も維持されていくことになる。

また村全体としてだけでなく、個人ごとに見ても観光専業者はいないことになる。これは観光事業者と非観光事業者の間の溝をつくらずにすむことにもなる。これは、（1）で挙げた観光収入の公平な再分配制度が整っていることと併せて、コミュニティ内部での対立を避け、村全体、村民全員で観光客を歓迎する雰囲気づくりにも資することになる。

（3）地域資源保護に対する、現実的だが、

ぶれない哲学の存在

貴州省の民族観光振興に指導的な役割を果たしたのが、貴州省文化庁文物處處長・呉正光氏と貴州省黔南自治州副州長・呉徳海氏という2人の地方政府幹部である。呉正光氏は、文化財保護の立場の役職にいて、早い時期から民族文化の消滅の危機を強く感じていたが、その危機を回避させる方法として、積極的に観光開放して民族間の相互理解を促し、民族文化の地位向上を図ることが重要と考えた。呉徳海氏は、州政府の観光事業を担当し、少数民族の文化普及と経済発展のために観光開放が重要であるとの主張で積極的に村人たちを説得した。

呉正光氏は、このような考え方を「開放型保護」

と呼び、「死んだ保護はいらない」と言って、生きた人間が伴う文化の持続を第一に考えている。そのために呉正光氏は、生きた人間が行う限り、絶対に守るべきものと、時代の流れとともに変化しても仕方がないものとを区別して考えている。前者には、服装、環境、建築を挙げている。建築内部の生活空間をはじめ、その他のものは後者に入る。これは一見、乱暴なようだが、放っておけば近代化や漢民族化の流れにのまれて、民族文化すべてを失ってしまう状況の中で、持続的に守りやすい現実的な防衛ラインであり、民族文化を最大限残す最適解である可能性もある。

また、一見緩そうに見える考え方ではあるが、その絶対的な防衛ラインは明確であり、地域資源保護が形骸化することも防いでいる。実際、郎徳上寨村で現代的なデザインによる宿泊施設とそこに至る風雨橋の建設を州政府が始めた際には、呉正光氏ら省政府がそれに反対し、工事中止と宿泊施設計画を白紙撤回させた。

一方、伝統文化の変化に対する柔軟な姿勢により文化発展が見られる例としては、前述の「反排木鼓舞」のほか、我々の視察でも、ミャオ族の村・青曼村で、新しく創造されたツバメの踊り、肇興村では、周辺地域の埋もれていた伝統歌謡を掘り起こし訓練して歌い上げるといった事例を見ることができた。

(4) コミュニティの優れたリーダーの存在

(3) に挙げた文化保護に対する優れた哲学が地方政府側にあっても、コミュニティの側でそれを受け止め、理解し、コミュニティを率いる優れた役割を持ったリーダーと、それを実践していける組織がなければ、実現できない。貴州省各地の成功観光地は、そうしたリーダーと組織体制に優れていると感じられた。

郎徳上寨村では、村の政治的トップである共産党書記・陳正涛氏と、シャーマンである鬼師・陳玉輝氏の2人の協力と役割分担によるリーダーシップが、村の成功の大きな要因として挙げられている。共産党書記である陳正涛氏は、省政府の呉正光氏の働きかけとその背後にある考え方や経済的メリットをよく理解して村の観光開放を決断し、シャーマンであり村の精神的なリーダーである陳玉輝氏が、当時ほとんど反対していた村人を説得するという役割を果たしている。

共産党支配という“タテマエ”の権力構造だけでは、人々は動いたとしても形式的なものに終わってしまう可能性があるが、シャーマンという村の精神的リーダーが働きかけることで、“ホンネ”部分から人々を動かすことができたと考えられる。郎徳上寨村では、そうした権力の二重構造のホンネとタテマエがうまく重なるようにそれぞれのリーダーが協調し、村をうまく動かせたことも大きな成功要因と考えられる。

(5) パイプ役の存在（政府と住民、内と外）

観光開発をリードする政府側に優れた哲学があり、地域側にも優れたコミュニティ組織があったとしても、両者をつなぐパイプが存在しなければ、両者は結びつかなかったと考えられる。

前述の呉正光氏と呉徳海氏の2人は、地方政府の要職に就くエリートである一方、少数民族ミャオ族出身として、少数民族住民の代弁者という立場にもあり、中央政府～地方政府～地域住民の間をつなぐ役割を果たしたと言える。

特に呉正光氏は、北京で貴州省のトン族の建築文化を紹介する展示イベントを開催したのを皮切りに、貴州省の少数民族文化を積極的に中央政府にアピールする役割を果たす一方、それまで閉鎖的な環境にあった省内の村々を観光振興に向けて口説いて回るという上下両方向への働きかけに積極的な役割を果たしている。

また、近年、老漢族の村・天龍屯堡古鎮やトン族の村・肇興村では、地域の文化を理解する村出身の成功者や省内の大学教授が投資家となって、観光開発で主導的な役割を果たしている。この場合も、投資家は村の文化や事情を理解しつつ、外の事情や経営面にも明るく、内と外とをつなぐ役割を果たしている。

6. 今後の研究課題

貴州省の民族観光における今後の研究課題として、次のような点に注目していく必要がある。

(1) コミュニティの観光の適切なスケール

今回の視察で成功していると考えられる観光地の人口規模を見ると、概ね100戸500人前後というところが多かった。これに対して、千戸以上の伝統家屋からなる西江鎮は、見るだけの観光地となっている印象であり、コミュニティが観光に

うまく関わっているようには見受けられなかった。このコミュニティの規模と観光事業の関係は、今後、検証が待たれる研究課題の一つと言える。

(2) 旅行者規模の増大への対応

少数民族観光では雲南省が先にメッカとして発展し、貴州省は取り残された形となっていたが、この数年は飛躍的に観光客が増えている。こうした需要の急速な拡大に対し、保護と利用のバランスを崩さないよう対応していけるかどうか、近い将来の課題となろう。

(3) 外部資本の流入の影響

天龍屯堡古鎮や肇興村では外部資本による開発が行われていた。外部資本による開発といってもさまざまなパターンがあり、またその帰結も一通りではないと考えられる。民族文化の保護と観光開発を両立させるべく、どのように制限・規制・誘導してコントロールするのかが、地域と研究の両方の課題である。

(4) 文化の変化の許容範囲

今回の研究でキーマンとなる人々が文化的資源の保護について共有していた一つの考え方は、伝統文化の保護というものは、古い形を寸分も変えずに守っていけばよいという単純なものではない、ということである。文化は人の創造的活動の帰結であり、創造的活動は変容を許す環境でなくては存続し得ない。しかし観光は、伝統文化の保存に効果を発揮する一方で、俗化の危険を常にはらんでいる。この問題は第一義的には伝統文化の継承者自身によって自律的にコントロールされていくことが望ましいわけだが、今回の研究でも明らかとなったように、ローカルコミュニティの自律性がオールマイティというわけでもない。成功の公式を見いだすことは困難であり、常に議論が繰り返されていくべきテーマではないかと思われる。

(5) 旅行社・ガイド側、旅行者側の教養・マナー啓発
民族文化に関する啓蒙は旅行社やガイドに期待される重要な役割だが、いまだ十分なレベルとはいえない。問題の根底にあるのは対象に対するリスペクトの欠如であり、これは一企業、一産業の問題にとどまらない。

(6) 地域側の観光受け入れのための啓発・教育

民族村の観光では、ビジターの来訪が恒常化するとホスピタリティやサービスの質が低下するケースが見られる。ビジネスとして伝統文化を見

せる以上、この問題にはコントロールが必要である。そのためには、地域住民に対する啓発・教育活動が必要であり、一般住民や子供も含めて、すべての住民が観光の意義を理解していくことが必要と考えられる。

7. まとめ

先に貴州省の民族観光の成功要因として、以下の5つを挙げた。

●観光収入の公平な再配分制度

●専業でなく兼業の観光地

●地域資源保護に対する、現実的だが、ぶれない哲学の存在

●コミュニティの優れたリーダーの存在

●パイプ役の存在（政府と住民、内と外）

こうした成功要因の基盤にあるのは、“コミュニティの自律性”であると考えられる。

優れたリーダーが存在し、観光収入の公平な再配分が行われているコミュニティでは、和が保たれ、ガバナンスが安定して行き届くようになる。地域資源保護に対する、現実的だが、ぶれない哲学の存在により、コミュニティの住民の中にも理解・共感者を得て、上意下達ではなく、自律的にものを考え、現実に対応して応用問題もこなしていけるようになる。専業でなく兼業の観光地であることやパイプ役の存在は、中央政府などの上位機関や外部の市場圧力といったものの影響をただ甘受するだけの存在ではなく、コミュニティが自律性を保ちながら存続していく支えとなる。

郎徳上寨村をはじめ成功している観光地は、最初のきっかけこそ地方政府など外部からの働きかけだったかもしれないが、その後は、政府の力は借りるものの、上から押しつけられたプロジェクトや計画をただ実施したというわけではない。ほとんどの村民が参加する形で、村自体が方向性を決めて一つにまとまり、創意工夫を図り、さまざまな困難を乗り越え、自発的に努力を続けるといったことで、今日の成功を導いてきた。

コミュニティのスケールを適切に保ち、旅行者の増大や外部資本の流入にも適切に対応しながら、自分たちの伝統文化と生活のバランスをどう保つかを自ら考え、観光地としての地域教育を行うことが、今後、コミュニティの自律性を確保し持続させていくために重要なポイントになると思われる。